

教会たより

報 月
NO. 452
12月22日

I. 随分古い話になるが、たまたま、ある教会の夕礼拝に出席した。直前のクリスマスに受洗した中年の男性の証があった。

彼は何年も、日曜日毎に、教会に通う妻と二人の娘を車で送迎していた。ある日、娘が言った。「お父さんはとてもいい人だから、きつと極楽に行けるね。でも、お母さんと私たちは天国に行くから別れ別れになってしまっね。」

この言葉がきっかけで、彼は送迎だけではなく、自分も礼拝に出るようになった。そして、遂に受洗に至った。これが、彼の証の内容だった。

II. これは比較的最近の実話。70歳の妻が教会に通うのを快く思わない80歳の夫に、妻が言った。「あんた、私の方が長生きするんだからね。あんたが寝たきりになったら、無理矢理でも病床洗礼を受けさせるからね。」



夫は思った。「歳も若いし、女の方が長寿だから、これは本当になってしまつかも知れない。何も知らないままに、洗礼を受けさせられてはたまらない。」彼は、その時から、密かに聖書を読み始めた。やがて祈りの真似事をするようになった。妻には内緒で。

極楽か天国か

数年後、夫は体調を崩し、入院が長引いた。年末年始に仮退院した時に、果たして牧師がやって来た。これから洗礼式が始まると言いつ、教会には二回ほど出ただけなのに。彼は抵抗したかったが、一方で、その時が来たかという諦めも感じた。

誓約の段となった。牧師は言う。「声が出なくとも、頷くだけでも大丈夫ですよ。」あなたはイエスがキリストであると信じますか。時間は一瞬。しかし、死に瀕した人間が

体験するという、走馬燈で自分の人生を振り返る思いがした。

数日来、会話が辛くなっていたのに、彼は、しっかりと声で答えた。「はい。」

受洗後、彼の病状は劇的に快復した。しかし、足腰が弱っており、礼拝に出席することは困難だった。

彼が、受洗後初めて教会に出たのは、妻の葬儀だった。

III. 神学生をからかうことが趣味みたいな小学5〜6年生のOSクラスがあった。毎日曜日のように、難問奇問を持ち出しては、神学生が困惑するのを楽しむ。それを競うものだから、神学生はたまったものではない。しかし、生徒たちのやりとりは楽しみでもあった。彼の方でも、生徒がにわかには答えられないような質問を考える。

「ここに、あなたの目には見えない人が一人います。それは誰ですか。」

「幽霊。」

「幽霊は教会には来ないと思つよ。」

「神さま。」

「神さまは、人間ではないと思つよ。」

「でもイエス様は人間だよ。」

神学生はしくじった。彼が用意した答は、

自分自身だった。

「他の人のことは

見えていても自分
は見えないんだよ。
鏡に映しても、左右

が逆でしょう。」

「この哲学的問答に持つて行くつもりだったのに、「イエスは神にして人間」という神学的土俵に引張られてしまい。彼は、敗北感を味わうしかなかった。

そのクラスに、まじめな性格で、神学生をからかったりしない女の子がいた。むしろ、神学生の味方をする。

彼女がほつりと言った。

「先生、良いことをした人は天国に行くんですよ。そして、悪いことをした人は、地獄に行くんですよね。良いことも悪いこともしない人は、どこに行くんですか。」

神学生は、「この子まで、意地悪な質問をするのかと戸惑った。そもそも、天国と地獄について、どんな説明をすれば良いのか。」

沈黙。

彼女が言った。

「先生、分かった。天国でも地獄でもなく、中国に行くんだ。」

彼女は大まじめだった。

